

## 動脈硬化に対するバルーン拡張術とステント留置術とは？

Q1. 「動脈硬化のために足への血の流れが悪くなっている」といわれました。どんな病気ですか？

それは閉塞性動脈硬化症という病気です。動脈硬化のために血管の内腔が狭まり、血の流れが悪くなる病気です。昔は少ない病気でしたが、食事や生活習慣の変化、長寿によって増えつつあります。

Q2. 治療にはどのようなものがありますか？

動脈硬化そのものを良くすることは難しいので、治療の目的は悪くなった血の流れを改善することにあります。治療には大きく分けて運動療法（リハビリ）、薬物療法（くすり）、IVR（バルーン拡張術、ステント留置術）、外科手術（バイパスなど）があります。軽ければ運動や薬物での治療となりますが、生活に支障を来すような歩行時や安静時の足の痛みについてはIVRや外科手術が行われます。

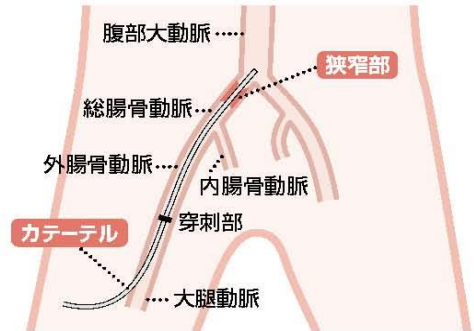
Q3. バルーン拡張術、ステント留置術とはどのような治療ですか？

狭くなったり、詰まったりした血管をバルーンカテーテル（先端に風船のついた管）で広げることがバルーン拡張術といえます。また、広げた血管を補強するためにステント（金属製の筒で網目状の構造をしている）を埋め込むことをステント留置術といえます（図参照）。

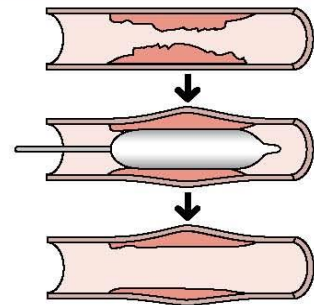
Q4. バルーン拡張術、ステント留置術の安全性は？ またキズは残りますか？

バルーンカテーテルもステントも細く折りたたまれた状態で体内に挿入し、血管内で広げるようになっています。どちらも使用前の直径はわずか2mmです。局所麻酔で行いますが、治療効果が大きく、また、からだの負担が非常に少ないことが特長です。専門の医師が行えば非常に安全性の高い治療です。治療当日は止血のために安静が必要ですが、翌日からは歩行できます。皮膚のキズはほとんど残りません。

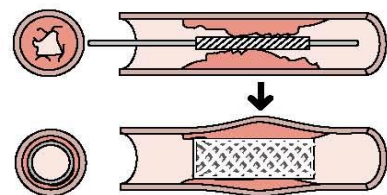
足の付け根の血管から細い管（カテーテル）を入れて、狭くなったり、詰まったりした場所まで進めます。



**バルーン拡張術** 狭くなったり、詰まった血管をバルーンカテーテルで広げます。



**ステント留置術** 広げた血管を補強するために、ステントを埋め込みます。



**Q5. IVRによる合併症、トラブルはないのですか？**

バルーンカテーテルやステントの挿入経路に血腫（内出血）ができることがあります。また、拡げる際に血管の壁が裂けて解離を起こしたり、遊離血栓（小さな血の塊）によって血の流れが急に悪くなったりすることが報告されています。他には血管破裂、動脈瘤などがあります。予測や回避が困難なトラブルもありますが、一般には経験の多い医師が行えばトラブルは少ない傾向にあります。

**Q6. 治療を受けるには何科の医師に相談すれば良いのでしょうか？**

バルーンカテーテルやステントを使っての治療はエックス線透視下に行われますが、もともとは血管造影検査の手技を応用したものです。放射線やカテーテルを用いる上での十分な知識と経験を備えていることが必要です。特定の診療科がこの治療を行うということはなく、病院によって事情は異なります。代表的な診療科としては放射線科、血管外科、循環器内科などがあります。

**Q7. 入院期間はどれくらいですか？**

外来の時点で必要な検査が済ませてあれば、入院期間は3～7日です。追加検査が必要となれば、少し長くなることもあります。

**Q8. 治療は1回で終わりですか？ 治療の成績はどうでしょうか？**

病気の部位や進行度によって治療成績は違います。一般に腹部～骨盤部での成績は良く、大腿～膝部での成績はあまり良くない傾向にあります。この傾向はバイパス術でも同じです。成績の目安は腹部～骨盤部で5年開存率（5年間、拡げた部位が再度狭くならずにいる割合）が8割以上、大腿～膝部では5年開存率は2～6割です。大腿～膝部では多くの場合、再治療が必要となります。

**Q9. 退院後の生活ではどのようなことに注意すれば良いですか？**

閉塞性動脈硬化症は慢性疾患です。治療により動脈硬化を治すことは難しいので、悪化させないことが重要です。退院後は定期的に診察と検査を受け、医師から処方された内服薬は継続しましょう。また普段から塩分や油分の多い食事を避け、運動に努めましょう。歩行は血管の寿命を延ばす効果があります。またタバコは動脈硬化を悪化させ寿命を縮めますので、禁煙をぜひ実行してください。

日本IVR学会 広報・渉外委員会

日本IVR学会 事務局

〒355-0063 埼玉県東松山市元宿1-18-4

<http://www.jsir.or.jp/>